

第2章

アジア経済研究所の東南アジア経済研究

I 時期区分と成果の特徴

1958年に研究所が設立され、60年に特殊法人組織になってから数多くの論文や単行本が発表、出版されてきたが、その内容に照らして時期区分するのはかなり困難である。そこで、まず便宜的に『アジア経済』の100号、200号、300号の各記念号にリスト・アップされている研究所の東南アジア経済に関する論文や単行本の数を国別に分類し、さらにそのあとで主題別に分類することにより、大体の傾向を知る作業から始めたい。

第1表にみるごとく、『アジア経済』の100号ごとにリスト・アップされている東南アジア経済の出版物は、大体80~90本に達している。これを年間に直すと10本の論文および単行本が出版されていることになる。ただし、本として出版されたものでも、そのなかに掲載されている論文も単独で計算されているケースがあるので、二重計算されていることもある。そうした前提のうえで本数を国別にみると、100号記念までは27本のマレーシアが圧倒的に多く、ついで、タイ、フィリピンさらにインドネシアと続く。101号から200号ではフィリピンが22本と前回より2倍に増え、マレーシアは20本と若干減少する。インドネシアは東南アジア随一の大国であるにもかかわらず、経済関係の論文は少なく、201号から300号までの期間に初めて20本を超えている。これはそれまでインドネシア研究者には政治・社会や文化関係の研究者が多かったことを反映している。

ベトナム、カンボジアやラオスのインドシナ三国では研究者自体の数が少

第1表 アジア経済研究所出版による東南アジア関係の経済論文および単行本の対象国別分類

	100号記念 (1960年5月～69年7月)	200号記念 (1969年8月～78年2月)	300号記念 (1978年3月～86年7月)
フィリピン	14	28	24
マレーシア, シンガ ポール	27	20	22
インドネシア	10	10	22
ビルマ	1	6	6
タイ	18	18	16
ベトナム	6	3	2
カンボジア	4	5	1
ラオス	2	1	
合 計	82	91	91

(出所) 『アジア経済』100号(1969年7月), 200号(1978年2月), 300号(1986年7月)各記念号より。

ないため発表される論文も少なく, 200号で9本を数えるほか, きわめて少数である。ビルマ(現在の正式国名はミャンマーであるが, 本書では国名変更前の論文を取り扱っているのでビルマで通した)は鎖国状態が続いているため, いまだに現地に行って調査研究することが困難であるが, 200号, 300号にそれぞれ6本ずつの論文をみることができるのは, 困難な研究条件を克服した若手研究者の努力によるものであろう。

全体的にみて, 国別の研究者の数が少ないため, その研究者がたまたま経済に特化すれば, 論文も当然増加することになる。したがって, 国別の論文数の大小はほぼ研究者数に比例しているといってよい。しかし, 時期別, 国別に研究者の背景をみると, 各号によってかなりの違いをみることができる。たとえば, 100号では研究者は研究所内部のものより大学, 商社, 銀行, 官庁関係者が遙かに多い。これは初期の研究所では, まだ十分に研究者が育っていないため, 他機関の協力を得て研究所の研究委員会が構成されていたためである。こうした傾向は1960年代の後半まで続く。

II 国別・主題別分類

つぎに上記の論文，単行本の主題別分類を国別にみることにしよう。まず東南アジア全体の分類を行うことにする（第2表）。この表の分析にあたって，注意すべき点を2，3述べておこう。まず，調査研究の主題の分類をどのような基準によって行うかによって，各主題別論文数が大きく変化することである。たとえば，経済計画，経済開発と工業化を一緒に分類することの是非は，当然問題となってこよう。工業化政策または工業化の現状分析は経

第2表 アジア経済研究所出版による東南アジア関係の経済論文および単行本の主題別分類

	100号記念 (1960年5月～69年7月)	200号記念 (1969年8月～78年2月)	300号記念 (1978年3月～86年7月)
経済開発(計画)，工業化(政策)	11	15	7
農業，農村	36	39	39
財政，金融	2	4	4
人口，労働	10	2	3
企業，経営	7	8	14
産業事情	2	3	10
華人・印度人	7	6	2
所得分配	1	2	1
外国投資，国際貿易(収支)	4	4	
統計・産業連関表		2	
経済史	1	5	8
経済・社会構造	1	2	
経済法			3
都市経済(スラム)			2
合計	84	91	93

(注) 所内資料も含む。

(出所) 第1表に同じ。

済開発一般を取り扱った論文や経済計画に関する論文とは、別個に取り扱うべきかもしれない。しかし、あまり主題をこまかく分類すると、かえって樹を見て森を見ないことになる欠点があろう。書かれた論文の内容が時代とともにどう変化するかを傾向としてみるには、大枠分類の方が便利と思われる。

第2は一つの論文でいくつもの分野を同時に取り扱っている場合が多いことである。この場合はどの項目に分類すべきか判断に苦しむことになる。

論文の主題別分類には以上のような困難と問題を伴うが、論文の内容の時代的变化とその背景について大体の傾向を知るには第2表で十分であろう。つぎに、第2表からいくつかの特徴を指摘しておくことにする。

まず第1の点は、研究所から出版された論文、単行本のうち、農業・農村関係のものが圧倒的に多いことである。100号、200号および300号のいずれの号においても40～45%を占めている。これは東南アジア諸国が依然として農業を中心とした発展途上国であり、農業・農村の分野に深刻な経済問題が存在していることを反映したものであろう。

第2点は、経済開発、経済計画さらに工業化に関するものが100号から200号にかけては、農業・農村関係の論文について多く発表されている点である。しかし、300号では減少傾向をみせる。代わりに企業の分析や経営者に関するものが倍増している。これはマクロ経済の分析から企業まで下りたミクロの分析ができるまでに、統計資料が整備されだし研究も進んできたことを反映していよう。このことは産業部門別の分析が300号では100号、200号の時より急激に増加していることにも表れている。しかし、産業別解説論文が300号で急激に増えたのは、研究者の分析がより深化したことの反映というより、研究所の研究体制または組織に変化があって、研究者がそれに対応していった事情によるものであろう。この両者の違いはきちんと認識しておく必要がある。

第3点は、100号において人口センサスによる人口構成の分析ないし特徴を記述した論文が多いことであろう。これは当時の基礎資料のまだ乏しい発展途上国においてほとんど唯一、その国の一般状況を捉える資料として人口セ

ンサスがとりあげられ、分析された事情を反映している。ただし、この人口センサスの分析には大学の既存の人口学の専門家が参加して行っており、研究所の研究者はまだほとんど参加していない。同様の事情は租税制度、経済開発、土地改革に関する出版物にもみることができる。

第4点は、経済史に関する論文において、100号では1点にすぎなかった経済史の論文が200号では5点、300号では8点と着実に増加していることである。この分野では研究所内外の研究者の成果がほぼ相半ばしている。最近では所内の研究者の成果が増えつつあるが、内部より外部の研究者の成果の方がいまでも数において上回っている。研究所の研究者による経済史関係の論文が少ないのは、研究体制の根底に歴史関係一般の研究、調査があまり重要視されていないことに原因があるからであろう。

第5点は、経済法に関する成果が1980年代に入ってから急速に現れていることである。とくに投資関係の法律の整理、解説、問題点を取り扱った論文が増えている。これはとくに東南アジアの地域に限ったことではなく、発展途上国全体に同様の現象をみることができる。とくに1986年8月以降をみると経済法関係の出版が著しく増加している。

以上、300号までの研究主題が、どのように変化してきたかを簡単にみてきたが、全般的な特徴は農業・農村関係の成果はコンスタントに出されているが、次第に工業化・外国投資に関係する論文、単行本が数多くなってきていることである。この中には経済法に関するものも含む。実際、研究所において農業関係より工業化関係の研究委員会がしだいに多く組織されてきている。これは、日本の東南アジア諸国への海外投資が急増してきている状況を反映しているともいえる。その結果、農業・農村関係の論文、とくに農村の実態調査報告に類する論文の数が相対的に減少しているのは当然である。

なお、国別・主題別の出版点数の分類を第3表に掲げておいた。また参考資料としてこれまで研究所が研究奨励賞を授与した東南アジア経済関係の論文を第4表にまとめておいた。この研究奨励賞は1963年から始まり、これまで56点の出版物が受賞している。第4表から分かるように、東南アジア経済

第3表 『アジア経済』各記念号によるアジア経済研究所出版の単行本・論文の国別・主題別分類（東南アジア経済）

主題	100号記念 (1960年5月～69年7月)						200号記念 (1969年8月～78年2月)						300号記念 (1978年3月～86年7月)					
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
	経済開発(計画), 工業化(政策)	1	1	4	—	1	4	5	2	3	—	—	5	2	3	1	1	—
農業, 農村	6	10	7	1	4	10	9	8	5	4	4	8	7	8	2	5	8	7
財政, 金融	—	2	—	—	—	—	—	2	—	—	3	1	1	—	—	—	—	1
人口, 労働	4	3	1	—	1	1	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	2	1
企業, 経営	1	4	—	—	—	2	6	—	—	—	—	1	6	3	—	—	2	3
産業事情	1	—	—	—	—	1	3	—	—	—	—	—	4	2	—	—	4	—
華人・印度人	—	7	—	—	—	—	—	3	1	—	—	2	—	1	—	—	—	1
所得分配	—	1	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
外国投資, 国際貿易(収支)	—	1	—	—	3	—	1	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
統計・産業連関表	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
経済史	—	—	—	—	1	—	2	—	—	—	3	—	—	2	—	—	5	1
経済・社会構造	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
経済法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—
都市経済(スラム)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
合計	14	27	12	1	10	18	28	20	9	6	10	18	24	22	3	6	22	14

- (注) (1)…フィリピン
(2)…マレーシア・シンガポール
(3)…カンボジア・ラオス・ベトナム
(4)…ビルマ
(5)…インドネシア
(6)…タイ

(出所) 第1表に同じ。

関係17の受賞論文, 単行本のうち, 農業関係が8本を数えるのに対し, 工業関係(1), 貿易(2), 経済成長(1), 経済史(2), その他(3)となっている。また農業関係で受賞した論文, 単行本8本のうち農村実態調査のモノグラフによって受賞したのが5本となっている。

ではつぎに, こうした論文, 単行本の出版点数の処理を踏まえて, 東南ア

第4表 1963年から90年までの東南アジア経済に関する「アジア研賞」授与論文

	年度	受賞者	図書、論文名
1	1965年	田中拓男	「経済発展と輸入依存」(『アジア経済』第6巻第12号, 1965年12月)
2	1966年	田中忠治	「タイの農業開発」(所内参考資料第82集, 1966年)
3	1966年	アジア経済研究所 長期成長調査室	「アジアの経済成長と域内協力」(所内参考資料第87集, 1966年)
4	1967年	村上敦	「後進国における工業製品の輸出パターンについて」(『アジア経済』第8巻第8号, 1967年8月)
5	1968年	速水祐次郎 稲木絹代 小池賢治	「農業生産性と『工業化水準』」(『アジア経済』第9巻第9号, 1968年9月)
6	1969年	前田成文	「マラヤ原住民の経済生活」(『アジア経済』第10巻第5号, 1969年5月)
7	1973年	梅原弘光	「中部ルソンのハシエンダ・バリオ」(『アジア経済』第13巻第9, 11号, 1972年9, 11月)
8	1974年	田辺繁治	「Chas Phrayaデルタの運河開発に関する一考察」(『東南アジア研究』第11巻第1, 2号, 1973年6, 9月)
9	1976年	辻井博	「タイ国ライス・プレミアム政策の実証的経済分析」(『東南アジア研究』第13巻第3号, 1975年12月)
10	1979年	村井吉敬	「インドネシアの民衆生業」(『アジア研究』第24巻第4号, 1978年1月)
11	1979年	加納啓良	「ジャワ農村経済史研究の視座変換——『インボリューション』テーゼの批判的検討——」(『アジア経済』第20巻第2号, 1979年2月)
12	1979年	菊地真夫	「フィリピン農村における制度的変化——ラグナ州の両極分解型米作農村——」(『農業総合研究』第32巻第3号, 1978年7月)
13	1982年	水野浩一	「タイ農村の社会組織」(創文社, 1981年)
14	1985年	大木昌	「インドネシア社会経済史研究」(勁草書房, 1984年)
15	1985年	末廣昭	「タイ系企業集団の資本蓄積構造」(『アジア経済』第25巻第10号, 1984年10月)
16	1986年	原洋之介	「クリフォード・ギアツの経済学——アジア研究と経済理論の間で——」(リプロポート, 1985年)
17	1987年	永野善子	「フィリピン経済史研究——糖業資本と地主制——」(勁草書房, 1986年)

ジア研究の主だった業績のいくつかを課題別に分けて論ずることにする。